第３回「京都府茶業振興計画」策定に係る検討委員会　議事要旨

１　日　　時

令和７年１月 24 日（金）14:00～16:00

２　場　　所

宇治茶会館　第２会議室（オンライン併用）

３　概　　要

（１）開会あいさつ（京都府　小瀬部長）

（２）議　　事

①京都府茶業振興計画（中間案）に対する御意見とその対応

②今回の論点について

（３）意見交換　　（●：検討委員、　○：事務局）

論点１　最終案について

■全体

- 計画自体はよいと思うが、もう少し幅が広い大きな分かりやすい計画の方が理解しやすい。例えば「高品質な抹茶を増やす」等。
- 第一回検討委員会を開催した半年前と比べて、京都府の茶業の現状が全く異なってしまっている。今、京都府の茶業界は浮かれている状況にあると考えており、今の状態が本計画の計画期間である５年間続くのかどうかをすごく心配している。

■ブランド対策

- 抹茶の需要は非常に高く、プレミアム宇治茶認証に抹茶も入れた方がいい。認証制度は公的に取り組んでいる構造がとても重要であり、認証制度の構築については、もともとある制度を拡張し、そこをベースにすればよい。
- 認証だけではなく、機能性とかＳＤＧｓ的な部分、オーガニック、減農薬、環境配慮型の農業ができているかというのも、宇治茶のブランドを上げていく大きな要素であり、産地全体の取り組みとすることで、ブランドの格上げができると思う。
- おそらく５年後には中国で手摘みのお茶ができるであろうし、もし公的な大きなものが中国から出てきた時に、宇治茶とどこが違うかを説明できる方法を、今から考えておかないといけない。今までの認証制度や審査手法では、「おいしさ」という部分だけになっている。プレミアム認証では十分には果たせていない部分があるのではないか。「宇治茶」とそれ以外のお茶の違いや宇治茶の「ベネフィット」を明確化するため、もっと議論が必要。

■生産・産地対策

- 抹茶ブームなどの報道が宣伝になっているのか、店で求人募集をしていると応募が結構あり、以前とすごく状況が変わってきている実感はある。さらに、SNS で様々な方が様々な発信をすることで、今の茶業界は景気がいいから働きたいという人が増えている。このような取組を活かしていければよい。
- 新商品としてマーケティングをする必要がないのが「宇治茶」というブランド。そのため、宇治茶のＰＲを重点的にやっていくことによって、お茶が売れる、売れるから作らなければならな

い、だから担う人材がいる。というストーリーを描きながら進行ができると、本計画の中で書かれていることがスムーズにこなしていける。

- 全国的にてん茶への転換が進んでいるが、３年ぐらいしたらてん茶の供給が過剰になり、上手に経営をしないと大変な時期が来ると思う。今は大事な時期だと改めて思い、持続可能な状態で茶業で食べていける状況を作っていくことは必要で、それがあれば人材は入ってくる。

■文化振興・普及対策

- 土用の丑の日については別にうなぎではなくても、「う」が付けばよいなら「宇治茶」ではいけないか。そのような恒例行事として継続的な飲用習慣を喚起できる取組やPRが考えられないか。
- 緑茶全体をどうするか、特に高級煎茶、玉露の需要減少が非常に大きな問題。ニーズを生み出すためには家庭内ではなく家庭外が重要であり、これまでは家庭外で「お茶の無料」が長く続きすぎた。ティーペアリングなども生かして、様々なところでお茶を飲むシーンを作っていかないといけない。

論点２　施策の推進について

■全体

- 今、行政も団体も職員が減っている上に財源も必要なので、この計画をどのように進めるのかをしっかり議論する必要がある。
  - ○（事務局）本計画は我々の様々な課題認識を書いており、行政で全部できることではない。体制的にも財源的にも限界があり、行政ができることと、茶商さんや生産者の皆さんと連携して必要があり、関係者一丸となって取り組むための指針としたい。
- 現状ある様々な課題に対して様々な取組が必要だが、その中でも優先順位を決めて取り組むことが今後の課題。
- 課題の濃淡や施策展開に必要な期間などで分類し、対応していくということが重要。
  - ○（事務局）早急・重点的に取り組んでいくべき課題と、中・長期的に実施していく課題と分けて進めていきたい。
- 行政として本計画を公開した時に、京都府がお茶のことについてこれだけ関わりを持って、課題として理解していることを周知できるものになっている。本計画を実施するにあたり、まず第一歩として本計画をしっかりと公開してもらいたい。
- 本計画を実施するにあたり、解決すべき各課題に対して、情熱と並々ならぬ思いを持ってやりたいと手を挙げる人、チャレンジしてくれる人を見つけて、行政が強くバックアップするという形に持っていくのが、非常にやりやすい。

■ブランド対策

- 今の宇治茶ブランドをさらに安定して着実に上げていくためには、認証制度の部分をどう考えていくかが重要。検討委員以外の若い茶商や、農家の方々も、考えがまた違うかもしれないので、新たな認証制度に関して意見交換をする機会があったら良い。
- 海外の方は宇治茶への興味を非常に持っているので、その素晴らしさや歴史を正しく知ることができる検定のようなものを、日本語だけでなくて英語でも作成してはどうか。また、その取り組みを通して、宇治茶の情報をしっかりと伝え、理解している人をどんどん育てることにフォ

ーカスすれば、たとえ偽物が出回ろうが脅威とはならない。海外に情報を伝える人を育てる体制を作るには、京都発で取り組む方がスピード感がある。

○ （事務局）認証制度については、関係団体等とディスカッションしながら、考えていきたい。またそれをＰＲする人材を併せて育てていかないといけないという視点は非常に大切。

- 本当の品質の高い宇治茶をどのように海外にＰＲするのか課題。また、ＳＤＧｓに基づいた生産振興など、海外向けの施策は細分化して考えていくことも重要。

■生産・産地対策

- 宇治市が茶摘みさんの登録制度を作ったが、それでも不足している状況である。昔は農繁期に家の農業を手伝うような休みがあった。例えば大学生に、1ヶ月でも一定期間茶摘みに行ったら単位がとれるような制度を作ってもらい、より多くの手摘み人材を確保してもらわないことには厳しい状況。

○ （事務局）例えば長野県でリンゴとかの収穫の時期に公務員が兼業の許可を取って、手伝うという制度を作られた例もある。茶摘みの時期だけは、公務員の兼業を認められるようにする等、今後は考えていく必要がある。石破首相の元で、人材不足の１つの対応策として、公務員の兼業の幅を広げるようなことも検討されているので、今後考えていく必要がある。

- 荒廃茶園のあり方について、計画の中に入れてはどうか。機械刈りのてん茶でも、技術によってはよい品質のものが生み出せて、しっかりと値段が付く。

○ （事務局）荒廃茶園が生まれないように新たな担い手を確保・育成するため、農業大学校と茶業研究所、現地の茶法人が連携した形で後継者を育てる教育研修、就農支援、茶園引き受けの一貫体制を検討していきたい。

- 茶業を辞められた農家から茶園を引き受ける際、売ってくれないことが多い。茶園の引き受けにはリスクが付いて回っている状況。条件の良くない荒廃茶園の継承という難しいところに多くの支援をするよりも、条件のよいところに支援をして環境を整備する方が効果的。
- 荒廃茶園にしないでおこうと思ったら、新規就農よりも親元就農をもっと支援する方が確実。最近やっと補助要件が緩和されてきて少しは改善された。

○ （事務局）ようやく国が要件を少し緩和してきたが、親元就農支援については、これまでは非常に弱かった。

■文化振興・普及対策

- お茶の知識が乏しい料理人もいるが、お茶を飲み比べると何の料理に合うというのは多分すぐ分かると思う。ティーペアリングを活かし、「カレーに合うお茶はこれ」「サラダに合うお茶はこれ」などの表現によるＰＲができれば、この多様性の時代においても家庭でのお茶の喫茶がもっと進むのでは。
- 料理団体なども活用しながら、本物のお茶のおいしさを広く知っていただくことをしてもらいたい。